

# ケアを描く

育児と介護の現代小説

ケアとは、傷つけないこと。私は『居るのはつらいよ』（医学書院）という本で、そう書いた。それは一見簡単そうに見える。余計なことをしなければいい、安易に近づかなければいい、適切な距離を取ればいい、そう見える。だけど、実際はそんなうまくはいかない。なぜなら、ケアを必要とするとき、人は脆弱な性やトラウマを抱えている、とても傷つきやすくなっているからだ。したがって、ケアする人はとくに相手を傷つけてしまいうし、そしてそのことによって自分自身が傷ついてしまう。ケアをめぐる関係性には傷つきが満ち溢れてしまいがち。

そこに物語が生まれ、恋愛において生じる傷つきをめぐる、恋愛社会的構造に目を向け

## 人がケアを生きていく ありようを明らかに

誰かを信じるために紡がれる物語たち

東 畑 開 人

る。本書の編著者たちが縦糸としているのはフェミニズムの政治理論であり、そこで指摘されている「公的領域」「私的領域」の枠組みを、ケア小説を用いて脱構築しようとする。すなわち、私的領域におけるケアによって生じる傷つきが、ジェ

抱いた物語が選ばれているからであろう。だから、私は本書の読書を何度も中断しようとした。この書評がなければ、途中で読むのを一度やめていたと思う。というのも、紹介されている小説たちを次々と電子書籍で買ってしまい、そっちを先に読むようになってしまったからだ。それほどに本書の執筆たちは選んだケア小説たちを大切に扱っていると思う。

との関係が心をサバイブさせる。それはその誰かを信じようとすることそのものが、生きていくことへの信頼をかたちづけていくからであろう。逆に言うのであれば、生きようとするからこそ、人は誰かを信じようとし、そこに「深い関係」が築かれていく。それはもしかしたら錯覚かもしれない。しかし、それでも、そのはかなさが人生のある時期を丸ごと抱えるのだ。

そのようにして、魅力的なケア小説たちを読み解く中で見えてくるのは、私たちの人間的結びつき、繋がりが、親密性というものが、傷つきをめぐって紡がれていくという事実である。それはケアの原基にもなると同時に、ケア関係の中での傷つきを原基にして立ち上がってくるものでもある。傷つきをサバイブするプロセスで、ケアする人は誰かにケアされる。依存する。それはケアされていく当事者かもしれないし、また別の誰かかもしれない（本書で引用されているキティが「ドゥーリア」と呼んだ人たちのことだ）。いずれにせよ、傷つき、心が死にかけているときに、誰か

ケア小説。それは誰も信じられない傷つきと絶望の最中で、誰かを信じるために紡がれる物語である。そういうことを本書は教えてくれる。（とうはた・かいとⅡ臨床心理士、十文字学園女子大学准教授）

ンダーやナショナリズムなどの公的領域の歪みに根差したものであり、それにも関わらず人がケアを生きていくありようが明らかにされていくのである。

★ささき・あきこⅡ愛知淑徳大学・愛知学院大学ほか。日本近現代文学、国語科教育。

この本で取り上げられている物語はいずれも魅力的で、そしてそれが魅力的であるように本書の中で紹介されている。執筆

★よねむら・みゆきⅡ専修大学。日本近現代文学（宮沢賢治、村上春樹）、アニメーション文化論（宮崎駿、高畑勲）。



四六判・256頁・2000円  
七月社  
978-4-909544-05-6  
TEL.042-455-1385

筆者たちが深い親密さを